

小精語鏡

昭和十年
一月以迄錄

特別
14
1919
708



14
1919
93
708

精製
果酒
名酒
名酒



小精語鏡

昭和十一年起書

○善い言葉は常に単純で常々素人にも理解せし
 るべき常に合理的にボアスト

○単純に考へることも感得のちもあるべし
 証拠があるべし

○最も大きな真理は最も単純である

○真理は素人の常に修飾の多いものではない

小精語鏡

昭和十一年起書

その心あり

○単純に考へ人の心を魅せしめ兒をヤ動拍和
まじの心を魅せしめ人の心を魅せしめ

○天地を柱けし前か路く宏大なる心あり又
もいなり弱んぬる心あり

○悪口といふ奴ことのお人好むことあり自合の
者い所謂「愉快」なり

と、即ち他人の困難をいふこと、或る困難
のいふこと

○何れもよく自分をいふ人、何れも少しくか自
己の尊敬を拂はさる

○自己の力をいふと努めん事と自己の力をい
ふと異なる情ありんを思ひぬえ狭うらむと思ん
ふれ愛なるいぢりぢり大に又積るる事を恐
んるなり

○忍耐を喜びつゝと思つたが、考案を研究する場
合と同じ程に、実習といふのが、考案の中心が、
是れも物と成る、（一）かんじんの先生がやつて来
るやあや、即ち忍耐を喜びつゝべき様子が、
着てくやあや、（二）実習から痛んたつての心ある。
ラキ

○考へる考案のさい事柄を、（一）考へる考へる又
そのあつた柄を、（二）考へると同じに、（三）考へる考へる

ひん。

○思案の自由、（一）思案の心、（二）思案の人間の内
つゝ、思案を支配する、（三）思案の格、（四）思案の
何物か、（五）思案の心。

○考案の無、（一）思案の心、（二）思案の心、（三）思案の心、
彼も、（四）思案の本、（五）思案の本、（六）思案の本、
一、（七）思案の本、（八）思案の本、（九）思案の本、
しまつて、（十）思案の本、（十一）思案の本、（十二）思案の本。

○中庸の節書も、僅に三人の人の言に於て十五の
節句が設けられておる、一か七の算をも洵らせて、
もとらせしやうのことか出来るのだ。かゝる引換
万姓のところに於て、九尺二間の草葉草花も念に七
人の人間がつまらぬ。一か七の算も、素人の説の
漂泊者を迎へ入らうだ。

○自己の無識を恐るが、吾々の智識を恐るが
○念想も、自分を別府をんが、為の、他人が

カシク好つてゐる時、ん、んと静かに観察する
のもよい事だ。セカカ

○最上の幸福は一年の終り、なに於ける自己を、一年の
始めに於ける自己と見比べて、なと感ず
ることである。

○自己及び他人の為の最も大切なる愛は人間の
仕事、一善の為人の結果とも思ふこと、出来な
るい法、仕事、ラスキン

○人間の道の行者は凡て結果を待つて現はるの時
期が速く逝つておんがのり地、まんがけ主派を
責めるといふ教をいふて行者の地ラヌヤ

○何一つ創出しないもの者、雨を待ちまうし雨を
ひとしい 東洋の金

○夜の闇が天上の光を照けずやらの苦悩の
か人生の足ての表義を改めする トロオ

○輝ひかりの入つて鏡は鈍い音を出すか、まをこつて割

つてもへい、真の清い音を出すよみか、イヤシボ
リヤシ

○當り世界が為てんル最も有害なる誤謬は、改次
善を道徳と名づけて分つたことである

○生命のうらな宮内の偽像もも者大の方か、

○吾々の殆んどするての支出は、他人に真似んか
め、為さんてある エマソン

○私に百姓を愛するは、伎等、曲つて判断をす
る程、今に又、端をもつてあまいからある。
モンテニエ

○悪人の彼を考へん悪がまじく執せよというちハ幸福
であるか否か執一以時、悪人の悪を去るは
ドバンマ、ハーダ

○お前ハ何處の産物と訊かれば時、ソツラテスは、儘ハ全世
界の市民がやよと答へれば、彼ハ自分と宇宙全体の住民
と居て居るにやある。シセロ

○吾怪多すぎ、いかう時代も悪人共ハ自分達の穢
しい行為に、お教と道徳と祖國愛といふ奉仕するに

と云ふ偽面をへふせうと努力して来たのむある。ハイ子

○吾人の生活が肉体の分野から精神の分野へ移動
せん、ハ、まんのあど、まうく死が恐ろしくくるるの末、
完全な精神生活に終始する人としての、此の恐怖ハ
あつ得まんのむ。アウレリアス

○愚かろ人間、決然してゐるのが一考ハ、保し能ら、若
し此をを知得たら、悪人の愚かろ人間がハるんが
あらう。アサテヤ

Platon

Platon

○唾の舌ハ嘔吐きの舌よりもまじい 土師古の他説

○藝術の價値と科學の價値ハ、萬人の利益への私慾
なき奉仕に在り じヨシ、ラスキン

○左手をして右手の爲す事を知らざる一のよ^{ハライ}

○人からよく言いたいと欲するものは、自分のいふ所を並べ
立てるの事也ハスヤン

○生の道の廣いほどに多くの人々の此の處に居るを
知らぬ死の處を歩み進むればゴゴリ

○世が此の世に生れられた時、此の世の國の凡そ
人いまだん。此の世を去る時、其の世の國の凡そ
の國の凡そ人が泣き、此の世の國の凡そ人が

泣く 命の國言

○夫れこそ何物をも持たざる人、此こそ最も富める人
間にある 支那の國言

○他人の多くを許し、自分より少くも許す物^{ガズリ}
の富の満足は、其者の涙よりも得る

○波吼崖崩頽石歌、依寸文予不曾知、扶桑
才一嶼難比、今日初嘗摩脚皮萬葉集卷之四十一
時代打四寺僧

○一峯深秀

○一溪烟水

○一帆瓜吹

○古山雲一鴻

○洗髮脚のむから人を呼夏ノ川柳

○辛塔遠より一ツ付けけしき紋所夏ノ川柳

○鏡より見えぬと下ぬれあはれつもの夏ノ川柳

○上着履思ひせがりの春がまき夏ノ川柳

○蛸牛何の格好か角がまき

○下ぬれあはれつものせがりの

○後武者を圍ふ馬に因り入

○荒奴を望みきせがりの乳舟橋

○脚の火がたれまき上る牛の時

○如ふり留守よりちぬれ手合ひ

○ 恥のい夢の三十日とけけ
 ○ 形えとをえんかおれ七悲し
 ○ ぬらへから鹽く物う
 ○ 初の子を寄合にま抱いて出
 ○ 今ハ子の出来と文七手も下り
 ○ 女郎の丸をとおはる針仕
 ○ 極めとてうへ頭をつきつけ
 ○ 胸帯を締めると腰ふきき来

○ 女信を持つれ魁から夏那也
 ○ 細雨天涯一酒杯 亂望哪々日昏
 掩卷難忘安 疎柳平橋似故園 荇文
 ○ 古侍沙河の一渡 此身法共神
 岸無船到 楊柳街の春 洲 千里烟波
 十年魂夢入 錦山 扁舟西塞山
 待再遊 的 醉 畫 詩
 ○ 峯恋千萬重 空村更春差 此中
 西置我

何日は旧規 查昇 世に

○春は雨夏夕主に秋日しり世の中りふのれ我
乞ふらせば、

○紙の音刺し響る書箱のふ 眞冥

○舌の先山葵に焼ける初盤

○瓢箪か飯も味りも刺せんすん 白視の命

○剃刀の手元をさすも 紅の冬

○裏表をくぬかぬんさかりけり

○二条のまじわぬ控茶りけり

○大仏の散るぬ病茶あるしものを悼きぬ

○民の血を志のりしもの牡丹の家

○三月や雲の紅けり杉林

○涼風や吹きて提灯の吊りどころ

○火の種を育てて目刺を茶りけり

○かきくもや脈もあまらん能飛び

○学てこそはゆき火の茶りけり

命書

命書

〇昔の世界世の中をよも月や花
 〇腋のくらくと禿いぶらさかり
 〇血眼もろく禿をさう放し
 〇つかまへに盛美に禿早く寝せ
 〇アつちにも受出しても禿泣き
 〇せめしと禿を寝かす物近目
 〇おろろ禿即座席をつき
 〇又中世禿我の名を人まき

〇禿ろくあふまのこを云ふ
 〇三考の右と左はすぬかしく
 〇腋のくらくと禿いぶらさかり
 〇肌寒く行焼畑のこえん酒
 〇野暮かまの行焼畑の一抛子
 〇公るい行焼畑の焼くめく
 〇擬将漢語の吟哦我は牙の一生記
 吾頃未熟吟未三十一言歌

○レヨウペンハウエル以て生物の無枝樹に勝
りて高きもの所以は、その一は地球の引
力打ち勝つ力ある也

○天才ハ比遠鏡の如し遠きを望むるす
と、近きを視らん事可也

○吾等ハ一層ハ世界の果を極むべきもの
べくハ神祕の宇宙の興味を増すもの
ん

○昔の神話に如く、時を過ぎれば、
またあつたこと、
に、
ハ、
ハ、
ハ、

○現世の行ハ、奢侈の十分の一ハ、
判を執るハ、
日、

○先人ハ、人を制するハ、
血統の法、
原、

○藝術ハ、
口、
ハ、
ハ、
ハ、

ハ、
ハ、
ハ、

の支ぬと人間の心の奥底に達することと其の藝術家の観念
シユーミン

○単純の模倣は美術を成すに必らず何事の結果を生ぜず、吾人が他人をも傷つ来ることを一応吾人の内部に入り更なる再生に来るを要す。シユーミン

○藝術はあらゆる精神精神とそれの材料ハ又文面を媒にする街頭の道にグリーニム

○眼は晴るべき表出の彼の死せる文字及び冷うき物語より多くの影の影を
こと確し………死ぬ、又劇中の舞臺の彼の乃後のみ法徳………深く且つ………永き………

○演壇に在るの感持主………印刷に在るの感持主………エニナシ

○浮世禁枯城材問

○如照梅窓幾夜心、姓魚上信大杉縣推
醒即夢教即聽、目下送傳史々聲春法の

○山出一の女真綿とつゝみり川柳

○帝御崑崙雪置之扶桑東、笑兀五千仞

芙蓉種秋山玉山

○帝御芙蓉雪置之春燕西、凝心崑崙山
敢欲較高低山陽

○帝御芙蓉雪、拋作崑崙山、雪汁即黃河

却向東海還 同上

○蟬送夕陽不揚聲

○人烟寒稿袖、秋色老梧桐

○佳人半解坐生春

○夕照没將去、滿江秋色寒

○深院無人到、閑禽時啄苔

○滿溪蒼樹、半坐生寒

○出無唱聲入無聲、惟有盈瓢酒似多、隨止

随行随安 碎玉 疾不雨 又钱 味以

○霏 草 树 荒凉 长 销 靡 不 其 世 相 闻 上

○漁 父 問 以 舟 樵 夫 各 以 山 一 洞 共 一 谷 不 離 出 矣

○澗 樵 斧 釣 蓑 外 是 非 無 所 聞 鳥 飛 在 其 漢

魚 自 躍 溪 淺 決 露 望 斜 陽 各 自 向 家 還 林田 澗 樵 問 答

○古 墟 懷 道 草 澤 兮 狩 第 候 家 處 之 米 鍾 處

○湖 平 古 岸 闊 瓜 山 一 眼 懸 杜甫

○身 世 誰 交 蓬 根 原 花 坤 一 谷 亨

○天 之 機 悔 事 安 也 七 九 十 九 人 一 也 一 人 之 罪 人 之

機 悔 事 之 機 也 一 也 一 也 一 也

○ 後 家 之 機

○ 心 笑 之 機 也

○ 子 之 機 也 止 下 之 犬 之 名 也 也 也

○ 木 之 機 也 善 者 之 機 也 也 也 也

○ 心 之 機 也 也 也 也 也 也 也

○ 花 子 之 機 也 也 也 也 也 也 也

○かゝるに惚れぬ先か直ぐも
 ○さうして七好い方をえり形見とけ
 ○お銀が尺八を吹く顔は出来
 ○かきおきこのつこもやまきこいお女
 ○流し呼ぶ者も子あつてつる
 ○まきくいひるを姑も
 ○本河船も今の方、札か多
 ○真の神木綿布さく尺と吠え

○七つと寝て流るん嫁消えれこそ
 ○女湯く起れくと抱いて見
 ○麦歌小一品程おつ倒
 ○町田無人舟自棹
 ○戸中酒人の恋
 ○長着有難又取も、不許似無夏
 ○天陰激有内山色入冥濃、楊柳合煙保杭
 映の紅橋歌春柳外路冷意橋東漁光

来晚汀汀繫釣磯 紀伊 是春日烟の目

○短上臨蒲保未齊江浦外陰一打低柳陰
小艇無人自是流先下別後 呂宋島(采)

○清徳禮和 珠光

○和歌清寂 刊休

○茶のよきあそびを切ふあふよき茶を切ふ茶のよき
あそびを切ふあそびを切ふあそびを切ふ茶のよき
あそびを切ふ 村瀬榜亭

○鈴の音後ろの又十の梵天 子風

○木おくれて石春の家の帳うみせを切

○松風と少けば浮世の帳うみ 夏考

○茶爐頭上毎宿主、佛畫人間若利塵

○南山起雲、北山下雨 瑞石山

○けがきしと思ふこゝろをもとむらん世流る橋
とらふを思ふ 兼基録

○江南野々碧於天、中有白鷗閑似我 甚ふみ

○上平の... 後々と見えし河のぬけ...
三月 宝永二年

○千や口の茶とす人... 心の茶の湯...
そま利休

○うん... 系かくん梅の... 杜四

○夜... 河... 木... 何... 宗社

○菊... 菊の奴... 蕪村

○一白千山... 清元照暎寒

○有... 蓮葉間... 警州... 下高村... 辟字波

得... 魚... 一... 光去... 唐鏡起

○深身浴徳... 刮垢磨光... 浴をえり

○石... 春暖人... 宣... 谷... 閑... 谷... 温... 泉... 魚... 多... 合...

○山門を出... 日本... 茶... 摘... 吸... 菊... 舎... 山... 白

○月... 日の... 河... 澄... けり... 不... 尽... の山... 士... 所

○不... 厭... 山中... 生... 針... 冷... 榛... 栗... 一... 淡... 柑... 一... 頃... 胡... 瓜

す... 夜... 未... 攀... 枝... 臥... 見... 依... 念... 撼... 月... 影... 精... 亭

翁... 墨... 後

七... 葉... 草... 花... 記

○衡門客去秋夜長，紅燵熨甚愛清香。陰蛩
吟絕秋將盡，香柑爪室夜未央。窓前明月影漸
散，鑄罏爐上移爪狂。移爪鼻，狂且佃也。怪相和
弄，筆箋法有便擬山中相。時見浮々白雲揚，
拍有樵童有力未回神仙金玉漿。却笑當時陸
鴻漸，若任若論事何忙。獨坐獨斟，還自飲
飲罷，自玩造芳忘却心中不平言。五更燈
火對空堂。守鼎齋茶歌

○青梅十二是侬家，下瞰大江浪淘沙。淘去即
思滋味淡，淘去即思山更加。淘去淘去無定
處，誰知儂意亂如麻。但味浪淘沙河

○川上看欲暝，餘紅在層巒。初弦月，鮫幄
香寒，岸送行人小。村幽獨柑園，喚舟沙鷗立。
秋水正漫々，晚晴秋山

○玄海秋高轉渺然，長空回有一憑舷。溟濛欲動
朝鮮色，香露終分日本天。爪捲怒濤縣壑起

月含層柳壓春愁。愁心夜。鄉園夢。魚雁音書。
何處傳。化他民。淚玄海。

○春風倚棹溯長河。弔古登高感慨多。他隱悲
荒看鹿臥。離宮禁。絕少人。過花飛林外。鷓鴣啼
雨。州府倚。欽若。照波。村婦不知香。日恨隔
烟。齊唱采茶歌。魏公美。亮道。覽古。

○第簷白雪。華。擁。對。煙。燻。少。如。欲。結。言。渾似
阿。命。乾。夜。願。之。香。

○烟霞如畫好。前山薇也肥。清君且出。生。偉。今
沽酒。情。解。敢。推。留。笑。能。

○夜歸幽竹。暎。月。去。見。輕。烟。欲。向。前。村。去。酒。家。友
未。眠。秋。玉。山。夜。歸。

○相送不勝悲。春風酒一卮。莫以爲。友。日。即。是
別。名。時。春。日。送。別。回。長。溪。

○妾心如洗素。郎心如洗紅。洗素素愈白。洗紅
紅漸空。玉。山。古。壽。

○昨夜君何處，莫是在平原。君情不可隱，君衣
有別香。望田邦吳六盤曲

○春風天掩亂，幽意惜年光。未忍掃山徑，歸來殿
香。周表先

○門在白云頭，路徑黃葉堆。幽長無路尋，疎懶
生涯。石龍賦

○大嶽削成十二重，翠屏羅列鬱群峯。千年天樹
松，蒼鶴百尺危流掛白龍。星落時看天狗舞，

雲依帝後異人蹤。真靈地古多祥景，東海
誰言無岱宗。石山精妙義山

○人生七十年，須飲百觴前。只是金尊酒，尊
公斗十千。滕忠純

○花開人不來，花在人不在。春風如有情，吹送
主人側。高維表書惜花

○蓮子可為餐，蓮葉可作衣。如行前漢水，
獨采蓮花歸。秋玉山

○江深不可涉，山高不可攀。惟有江山隔，無地望鄉園。南宮岳家言不至

○朱梅結暖吹，少婦凝粧粉。細語難少得，纖手拈行人。女媧

○滌海千年龜，瀟湘百里洲。浪撼樓臺湧，天閉峙嶼金。鷗鷺翔紅日，魚龍噴黑雲。三山何處是，烟霧坐氤氳。德帝山 平河

○微雨暮花清，淡烟古木蒼。杖屨通野寺，荒

磴下山門。仙梵風潮迥，古龕龍象尊。雲芽秋爪味，無意問清樽。梁內邦美 也香名院

○長鑣終掃去，其如弄壺何。爪靈難際會，項命易蹉跎。空抱青雲志，幾知白雪歌。平生憶慨一長吟，今日為君多。澤維題 送也

○臺天淡水釣情輕，自適悠一仲卿。殘月一溪秋景晚，漁翁步屐酒家。內吟 暖亭 漁父

○賣魚買酒亦風流，羨望生涯醉在舟。烟

大花之三葉氏、臺花の月一人秋日上

○祇能鍊色補天、如也人間有朱顏、傲骨嶙峋
峯長石花、山中終古抱雲霓石日上

○莫做尋常畫匠看、淋漓滿墨與、日上
元流一色、銀河落、滿壁千幻六月寒流日上

○江橋揚柳、秋生烟、萬條千條、風雷牽、
六一第三四八、春波暖浸白鴉天日上

○茂木無主、天地寬、羊腸樵路、入雲盤、夕陽度、

空山影、刻露峰、日上
是骨也、寒

○古寺橋、其傍夕陽、鐘聲出、
一跡僧啼、木末鴉、日上
之塔影、去

○古寺橋、其傍夕陽、鐘聲出、
一跡僧啼、木末鴉、日上
之塔影、去

○古寺橋、其傍夕陽、鐘聲出、
一跡僧啼、木末鴉、日上
之塔影、去

○古寺橋、其傍夕陽、鐘聲出、
一跡僧啼、木末鴉、日上
之塔影、去

女 猶太教徒

○忘れず、頭は悪魔の好む、葉の場所にある
ゲータ

○恥づべき、品々不浄な仕言むらさし、不浄の内が
も最上、不浄な道徳的状態、即ち他人の労働
の利用と結びつこうと、清くい内体上の道
徳がある。トリスト

○山の頂上に居る人々の平地に居る人々のより早く

○この世とある、霊的言説を立つ人々こと因らぬ
致著の内、生流と述べてある人々の心は、
天の日の出を見るか、時が来たか、日ごとく
人に見えくはじの、身をもん、世界を道徳
○其の善術能なる丁が母親、聖徳の境
胎の娘は、先行する生活の果を、いんぐ
たまは、折家の魂、現ん得るん、さあ
○その加祿の存在を、理、い
家

母を抱かぬ乳のみゆか任ずるも抱かぬ感徳を
 抱かぬところも、神の臣属の言説もあつた
 であらう
 の聖徳の自分を守り暖め育んでくつても
 誰かあつてもおつてもが、この何あつた存在
 してゐるものか。あつてゐるものか。自分
 が、自分を守りてゐる。此何あつたものか。あつた
 だ、ダダダ

の悪い車輪の帯に悪い方をまて、軋む。空る後
 にも、この世の生と生涯の一部をこし、事を構し
 たい。何あつた。私、自分から何かの貢献をし
 てゐる。理由を持つる。抱かぬ生きたまはか。あつた
 こと。終つて、来ぬ。私、自分の本物の家
 がある。抱かぬ。生を捨てて、あつた。何あ

る、その母に託す存在も、過渡的なもの
一時的なものとして、その運命づけられたもの
さぬと考へておられる。一七〇

○この扱ひも温良な言葉の婦人の言葉上の装飾である。
○美しいのは美しいが、婦人のまあるく正當なるけんか
への何となく婦人の正當なるもの、自分か美
しさが生み出し得る善悪に抗するところが
のまはる、
レスリング

○良心の要求より抗し難い、その神の要求
が従うと、二重にこれに服する方がよい

○帝王の聖者に向つて敬愛する
一その方の余の心を考へてあるか
聖者の心を

○帝王の聖者に向つて敬愛する
一その方の余の心を考へてあるか
聖者の心を

—はい、あつちきやう。從一神の存在を忘るゝ
た時、

○愚人に賢者の位は一生を送りて少くも
我と識り得る。是の下は、スプレンがスープの
味を解し得るのと同じく、佛性の識

○人のおぼい事、佛性の識、佛性の識、佛性の識、
まじりて、佛性の識、佛性の識、佛性の識、

○他人の心を愛とせしむる、佛性の識、佛性の識、佛性の識、

要として、人、佛性の識、佛性の識、佛性の識、

○時折り、佛性の識、佛性の識、佛性の識、佛性の識、
部と非て、自己の神性的本性を、見識め、佛性の識、
佛性の識、佛性の識、佛性の識、佛性の識、
生と、佛性の識、佛性の識、佛性の識、佛性の識、
を、佛性の識、佛性の識、佛性の識、佛性の識、

○善き知識、佛性の識、佛性の識、佛性の識、佛性の識、
ん、佛性の識、佛性の識、佛性の識、佛性の識、

のこころが、まきの注家より切なるまきしん此世の生
出たのこころが、まきの注家より切なるまきしん此世の生
のから出たのこころが、まきの注家より切なるまきしん此世の生

此世の全生涯の目的を達しその所進である。
法に依りたる意のわがまを、まきの注家より切なるまきしん
休もいともく、まきの注家より切なるまきしん此世の生
まきの注家より切なるまきしん此世の生
位は境あるまきの注家より切なるまきしん此世の生

る思ふに感ぜられたるを、まきの注家より切なるまきしん
此世の全生涯の目的を達しその所進である。
法に依りたる意のわがまを、まきの注家より切なるまきしん
休もいともく、まきの注家より切なるまきしん此世の生
まきの注家より切なるまきしん此世の生
位は境あるまきの注家より切なるまきしん此世の生

此世の全生涯の目的を達しその所進である。
法に依りたる意のわがまを、まきの注家より切なるまきしん
休もいともく、まきの注家より切なるまきしん此世の生
まきの注家より切なるまきしん此世の生
位は境あるまきの注家より切なるまきしん此世の生

あつても、荒し七老の如く任するものか、(まじい)も陰人生
の幸福を好むるを本原を信する者、(こゝ)を信せざ
るゝのゝんどのに於し、吾々はなんといふ時、(おん)の
死と生、吾々の身は爲しとげ、(おん)のゝんどのに
吾々の幸福の爲のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、
吾々を信せざるゝのゝんどのに、(おん)のゝんどのに、
○自己の理性を使駆する、勇氣を持つゝ、(おん)の
化の天、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、

○吾々の最々たるもの、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、
吾々の他人の善い所を見、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、
くけん、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、
のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、

○宗教の愛の最々様式は、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、

○思想との病氣の肉体上の病氣、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、
心、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、

○傲慢と人間、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、(おん)のゝんどのに、

善の「和善き人との賛成を求めぬ」との言ひ
あり。一か一のが善き人として平んがゆるの「世の隆
想する」を「世に認む」ことの「世に分つてゐる人
と心にならぬ」の「世に」

○利己心の傲慢の始まる。傲慢—是の抑
へ切らぬ「満洲の利己心」の「世に」
の「食へ」人間に「富裕する人間」は「一はく」も「七石ある」
「世に」

○富を「財宝」であるとする人の心は「死す」の「世に」
「世に」

○梅の白いよ、木立の「女」の「世に」

○梅（本調子）
○「世に」梅の「世に」

○「世に」梅の「世に」

○「世に」梅の「世に」

の約束も、傍や障りの紙の木も、木の

○ひきの障りも、きや紙の紙

○瓶梅夜不却の粧、夜睡移来、山以林、擬

向夢醒燈暗、雲依微、少得雪肌香、山陽

○へつらへ、心も暑き、袴に、紙入

○糸の砂に、すう、心も暑き、瓜、瓜

○涼しきや、歎とある、ち、響、響

○寺涼ふ、趣き、心も、動き、心も、心も

○六月や、道道中、すう、て、露、涼し、せ、あ

○涼しき、と、進上申す、三、三、三

○涼しき、と、大、幅、帳、を、枕、に、あ、る

○涼しき、や、あ、ら、う、向、き、を、な、れ、ぬ、紙、友、鬼、界

○暑き、日、を、涼、く、入、ん、だ、う、三、上、り、暑、き

○白、心、の、雪、き、ら、く、と、日、も、さ、ら、ぬ、心、も

○米、圓、の、上、の、女、の、暑、き、心、も、心、も

○て、り、つ、け、て、走、り、七、日、あ、ら、ぬ、心、も、心、も

合

合

○ 夏の雲又雲のかさろんは 惟死
 ○ 道はひに蘭干すかたの目若さし 許心
 ○ 日盛や傍子よ煮きく 僧の夜 蓮菟
 ○ 乳蜜んこみ波を 残の目若さし 尚白
 ○ 破ん鐘のい、きも目若し 夏の月 北枝
 ○ 夏一きのじんと 惜る目若さし 法一
 ○ 松花の旅人帯とく 目若さし 太徳
 ○ 端長しと妻子を 加けは目若さし 蓮村

○ 暑きわけりく 夏の暁 孫龍
 ○ 石も水 眼にひく 暑き 玄来
 ○ 暑かきんをいけ せ 瓜の 暑き
 ○ 涼しくの 涼りる 日のちん 涼甚
 ○ 日帰りの 元山 然の 暑き 蓮村
 ○ ちん冷し 鈴の 音の ぬい 涼甚
 ○ 冷風や 峰に 足も 踏む 汗心
 ○ 日暮りや 八方 所 暑き 子規

○三谷の日の露の跡を春寒し
 ○寒軒の苦きとめむ、後酒ふ
 ○尼寺の味噌摺る言や月おぼろ
 ○大佛のお目の細さよ春の風
 ○牡丹姫の意奴の局の星外
 ○我と我が噫にさめぬ夜半の秋
 ○数鶴の飽いて冬菜の茶漬外
 ○老心是来の

○野に山さうおんくもかへるを秋やまむ
 秋の夜の月 蓮月
 ○艶茶妖紅を給作堆高花速自外著
 樹枝先幹香清後獨有臥龍呼不未
 ○み自竹を流出冷風從花裡こ来香
 ○うら、かや桐を幹まふく志知長
 ○桐子の小室鮎釣まらひけり西表
 ○子供等の室地とらんれ怒桐を

毒三巻

九巻五頁

○四時日月星辰もき阿含金

物子

○花とんば物者の花のこほれけり 思深

○至人不留行 莊子

○人と淵論するは阿含の立場をひめたる茶者の
地権を主の物丸

○投書目的のハローコンを合のハローコンと後を
回氏も美の成するなり

○招選のハローコン云く「セ」と云ふは教板一丸

セのしるはく教板のやよ

○ハローコンは蟻と蜂と蜘蛛とも阿含はも茶者三

行教もとも混けり云々蟻は茶者三の能く

働き流く物を集めるが、自己の力に依つて

之を加えたることハローコンの蜂は花粉を採集し

之を物鏡も發を心る、蜘蛛は物を食する

悠然として自分の体内でも物細らさ糸を吐

き出し、茶者三の蟻は茶者三の蜘蛛は

毒三巻

九巻五頁

あまの路しつとす

○稔るそと 頭を垂る、福徳を

○朝魚に あさつての 苔多きころふと記

○朝魚の 浅黄の 蔭なき 夜ゆゑの

○朝魚や まじり 燈火の 影もあらず代

○朝魚や 蚊屋の内から 障子あけ 杉爪

○高鞅云 常人安於故習、学者溺於所
聞

○松無古今色、竹有上下節

○秋 か い ち ち へ け ん ぬ あ ま を 割 る

栗のいがけ

○後漢陳蕃、室有塵不除、以鮮勤曰孺

子何不洒掃、答曰、大丈夫當掃除天下、安

事一室乎。

○西を思ひぬえよと施の 雲白し於六

室をそえつ 劍いふ 雲は

○四河すぬあらしと大の板きん仇もあまの
船たよりのみ 陽記

○まろもせむ秋まつことかひる 鬼燈

○あきまつと思ふ心が秋かいり 大江丸

○稲あや躑をひとつーもこまの 也有

○身をいふ、わがかばりの家をもすめいさ
運ふかれつちりもよ 秋高

○一味無以和差、一木無以構空、一衣不稱素

體、一葉不療殊疾、一彩無以為文綺、一

聲無以諧琴今狂死、一言無以勸衆是去一

戒無以防多失 李師政内徳の篇

○古墟壞を草平涼く、將弟信家、安々

送

○一燈獨守寒宵

○一年常計百年

○時風三歌の七

の松原徳人

○昔の都に出むや宿にかたむすよの日の花
咲んけり昔月

○は一柿の軒にやせぬは里の夜あらし
暮くさうに昔月

○秋かほは月の前をわね死るるさ
こい昔月

○ろりえの心にかゝる雲さうし昔月

かきりのつらさの空の上辞書

○あまのつらさの空の上つらんあし昔月

○蓮のまに世の夜曲りけり昔月

○さくらくと唄いん昔月

○朝かみとるさう昔月

○れかひー大力のちし昔月

のころみよりの山 芭蕉

○かゆをくまきこしにまきつ城の雪ぬりそいつた
のそりてぬゆめ ぬるを中書

○やわらか人おけ行くや晴角力 凡書

○冬木三月骨髄に入る夜 凡書

○古海苔や石の穴注みの忘ん沙 凡書

○舟の子やあまろくそるおか人の危 大いぬ

○この唄にふくくし雲生寝坊 大いぬ

○昔男海鼠のやうにおけしけむ 凡書

○更くく夜や岩もえ山度も碎く言 凡書

○ちりこしと戻んの庭の柳 凡書

○雨佳芭蕉に乗るも敷きけり 凡書

○葉の花や淡も桂も忘んぬ 凡書

○木枯の果のちりけり海の音 凡書

○切えんや夢の涙の冬 凡書

○鹿出る中士あふけの月も見え 凡書

全書

全書

〇名月や草木に劣る人の影 松石
 〇雪うに霞にぼしてのきし 菘菜の白
 〇元日や鬼ひしぐさ七藤の上の
 〇大根川大根むるをあくけり一茶
 〇河田めや千葉に鳴き岩の檣 大岩
 〇十のー見て日生ん淋しき柳うま 柳良
 〇唐土の宙士あふかけかの月もえよ 唐土
 〇倦えくし温るの古衣や苔のそ 苔大

〇冬風馬の床すも松と 菅蓮
 〇元朝の元々うらやむ 宙士の山 山鏡
 〇涼しさのかれきうらんや夜半の月 月鏡
 〇又花うまけらまひも穴かーよ 夏鏡
 〇出かほりや切心に朽あつん 花鏡
 〇石のの離かーつこむし長んまゝの
 〇命あつん春あつん花のよー山 山白雄
 〇花の考に寝殿さぶきあつんーけの

○命あるの春も花のついでに白雁

○白菊の目にきて、見る座も

○秋の先づ目に立つ菊の蒼い

○歩々是道場

○世の中は交りぬとはあまふよひと

びぞわんいままん

○百川海を以て極とす。人道聖を以て極とす

す

○古きうのまゝ一き柱の

○義朝の心は似たり秋の

○此道を行く人なる秋の

○さらさら秋の

○年を九ぬま着せあらはさく

○首くく繩きん七午し年の

○侍の腹さく切らん炬燵

○心無事即祿

○終年林下人

○洞是寶

○去超華外、乃為華中

○春風解凍

○心安洞放

○靜者安

○自勝者強

○游神

○洞情時付解游

○林下有清福

○静か、五に若くは

○上見ん、乃及心、このあかりき、心之着てくらしむが

心

○下見ん、乃及心、まこと、静か、心之着てくらしむ、天のあきと

○我こそあ、小さ、心拾て、凡よ、大千世界、さへ

會經

大華嚴經

いふ

○我といふの息が暮らふに何とを福にあふ入の
ごき

○市走人の足さすのせとまき足さす。足さす
る身こそあはれ

○やふんが着物をさすよき。いんがづんの
錦さす

○二代の守本号れつぬん。我八人とも2領とけさ

○我庵のち天井に地のちちる。月日をあかり

風と千はこと

○為せば成り為さば成らぬ。世を成らぬと
まの我が為さぬ

○世の人に態を捨てると。あつちと捨て寺
の住職

○よき一の直く。困つたお天氣と千前。時
の人の世の中

○道長、伽羅をくくう、金の不細うたを
けちりたす

○恥をいふ恥をいふ、恥をかく恥をかく
恥をかく

○人多き人の中にも人を多き人と
する人とな
又

○ことばのつとむる、勤めよ、
勤めよ、
勤めよ、

○浮世もいなんの、
老いもいなんの、
老いもいなんの、

○負けを思ふ人と、
負けを思ふ人、
負けを思ふ人、

○實のいとと、
程のいとと、
程のいとと、

○徳思のいとと、
徳思のいとと、
徳思のいとと、

○かたき

○かたき

○S...見...
とよねとく

○外...
ゆの空へ

○一...
かしく鬼におそ

○...
溜りなせと

○三...
るい世

○...
い

○...
の星に

○...
おちつく

○...
思ふ

○...

○福在あま山子に射ん海の子
 ○すいさを四えましける酒寺
 ○大柳の腸のるま涼一
 ○花さいて思ひ出する時
 ○釣鐘の音にぬんち梅の家
 ○鶴の名をつけて行くはみか
 ○と行く灯や疎んと祢宜の袖

○山船に木魅冬くえ松の月
 ○まての淋しまたぬみ淋し次の時
 ○瓢かゝる茶の宴さを叩き出し
 ○春の日の懸ひ上げをま東山
 ○おだやうと虫ひ具の世を海う
 ○千のひらへ四々のせら
 ○百此のほん雪の道かつや
 ○役人の子のにぎしを能く見え

〇 役人のほろつばいり 精身も来七 川柳
 〇 回家元笑つて換をいれをこと 川柳
 〇 去き夜や孔の死も三回志 子規
 〇 秋まつや瓜七 茄子も花の散
 〇 鏡の音の輪をちて来る夜も哉
 〇 行秋や杉寂しーも 赤き雪
 〇 〝裏のあんといふのあんと雪は判る
 〇 口惜しや春の筈の葉

〇 うさぎよを掛けし衣掛や風後の
 〇 長安の市に日永し 賣卜者
 〇 人里一 朧月夜の花あかり
 〇 三味線屋かき出すおと 思父 川柳
 〇 歪の七めさ 向ふにいらぬ
 〇 笠巻の女はさしを 笠巻 川柳
 〇 光るの生んに 腹ノ穴をぬけ

狗文歌 街頭狗兒情何急，春風曾合歡期。北
自俄頭壯跨北馬，却似虎豹渡河時。玉壺終餘醇
醪，露銀瓶半吞珊瑚枝。漸入佳境，欲應熟，而身
相背轉樞機。一轉猶遠接，而頭八足狀態之
癡兒揚杖，驅不去，鴉峰固持欲放。遲公子馬且
偷眼過，在人轡中。全羞之，彼此遊也。難奈何，
進退雖極不能死。幸因傍人催白，而會無兩
散各分離。秋山三山喜也。



